

(122) 第一章を参照のこと。

(123) 貴族院内の一会派。同会は、大正二年七月には中川の離脱を契機に研究会に吸収される(前掲、「貴族院の政治団体と会派」一二三頁)。よって、この段階では「研究会男爵部」というのが正確とも思われるが、混乱を来さないため親和会のままとする。

(124) 前掲、「貴族院の政治団体と会派」、二二〇頁。

(125) 前掲、「大正一三年日記」大正一三年五月二二、二六、三一日の条。〔阪谷芳郎関係文書〕。

(126) 前掲、「大正一三年手帳」(「水野直関係文書」)。

(127) 第一章を参照のこと。

(128) 以下、前掲、「大正一三年手帳」、「五一二七」の項(「水野直関係文書」)。

(129) 後藤は西園寺に対して既成政党を非難する意見書を提出し、政友会と政友本党を早期に合同させて「実行内閣」をつくる必要を説いていた(「清浦内閣擁護、護憲論、政党論」、『後藤新平文書』)。このことから、後藤を総裁格として迎える事には西園寺の意向があったことが推測される。

(130) 以下、前掲、「大正一三年手帳」、「五一二七」の項(「水野直関係文書」)。

(131) しかし、一方で後藤への新党参加交渉は不調に終わった。但し、後藤の日記にはこれ以降も水野・池田との会見が散見されることから、引き出し失敗後も交渉が重ねられていたようである(「大正一三年日記」六月三日の条。前掲「後藤新平関係文書」R七五一―一六)。

西洋文明と日本の価値観の邂逅

——キリスト教徒内ヶ崎作三郎の明治天皇崩御観——

渡 辺 勝 幸

(玉井研究会四年)

- 一 はじめに
- 二 キリスト教徒内ヶ崎作三郎
- 三 ユニテリアン派と「六合雑誌」
- 四 「六合雑誌」に見る明治天皇崩御
- 五 「六合雑誌」に見る乃木大将殉死
- 六 「近代人の信仰」に見る内ヶ崎の思想
- 七 結 語

一 はじめに

明治維新後の日本における最重要課題は、欧米列強に伍していくために近代化を図ることにあった。近代化とはすなわち西洋文明の

吸収であり、明治政府は鹿鳴館に見られるような極端な欧化政策を進めていった。一方、かかる無分別な西洋化は国粹主義者を刺激し、日本の価値観を強く主張する者の登場を促していた。このように異文化である西洋文明の受容に際し、日本人は種々の反応を示した。本稿も、かかる日本人の反応の一事例として、明治天皇崩御時において一人のキリスト教徒がいかなる反応を示したかを考察する。

明治天皇は、明治四十五(一九二二)年七月三十日に崩御した。近代日本の統率者であったその死は大きな時代の転換点であった。さらに天皇崩御を受けて挙行された大喪の礼を待って、陸軍大将乃木希典夫妻が殉死を遂げた。乃木夫妻の極めて日本的な行為は多くの国民に影響を与え、論議を巻き起こすにいたる。

本稿の目的は、明治天皇崩御から乃木大将殉死という一連の出来事に対しキリスト教ユニテリアン派の機関誌「六合雑誌」¹⁾がいかな

る主張をし、同誌の主筆であった内ヶ崎作三郎が、これら日本的価値観が表出された出来事をもどりに捉えたかを考察することにある。この考察は、二つの相反する概念、西洋文明のキリスト教と日本の伝統的価値観の邂逅に際して、内ヶ崎をはじめとするキリスト教徒ユニテリアン派の人々がこれをいかに解釈していったか、すなわち我が国における異文化受容の一形態を明らかにする作業でもある。

因みに、「六合雑誌」は該時期に限らず、教会機関誌という範疇を越え論壇で活躍する知識人の寄稿が見られるという性格を持っていた。⁽³⁾このことから「六合雑誌」は一部のキリスト教徒に限定されない読者層を持っていたと見る事ができよう。「六合雑誌」に関する研究は幾つか存在し、内ヶ崎と「六合雑誌」の関係を宗教・芸術を中心とした分析した研究も存在する。⁽⁴⁾しかしながら、明治天皇崩御時に視点を定め、内ヶ崎を中心とする「六合雑誌」の動きを追った研究は、管見の及ぶ限り存在しない。また、内ヶ崎の著作に関する研究も同様である。

二 キリスト教徒内ヶ崎作三郎

明治天皇崩御時に「六合雑誌」の主筆であった内ヶ崎作三郎⁽⁵⁾とはいかなる人物であったのか、その生涯と交友関係を分析することによって、内ヶ崎の精神的基盤がいかにして形成されたかを検討したい。

仙台市の北一番丁教会で洗礼を受けた。以上のように仙台における内ヶ崎はバイブル・クラスに出席することによりその生涯を規定するキリスト教と出会うことになり、さらに刎頸の交わりとなる友人を多く得ることになった。この二点は内ヶ崎の後年の活動に大きな影響を与えることになる。

明治三十一年九月、内ヶ崎は東京帝国大学文科大学に入学し英文学を専攻、三年間講師小泉八雲の教えを受けた。帝大入学と同時に中央学生基督教青年会の会館寄宿舎に入り、明治三十三年九月になると吉野作造・小山東助も帝国大学に入学し同じ寄宿舎に入るようになる。三人はこの寄宿舎で青春時代を謳歌した。吉野は小山の死に際し、大学に入って間もない頃内ヶ崎と小山の三人で寄宿舎において議論をしたことを回想し、以下のように述べている。「内ヶ崎君は頻りに英国に於けるスコットランドの使命を説き、国家の精神的開発は、どうしても東北の人間が之を掌らなければならぬと大氣焔を吐いた。それにつひ釣り込まれて、といふと如何にも不真面目のやうであるが、其の当時三人は少くとも真面目であつたと記憶して居る。然らば我々三人が東北精神を代表して、日本の精神的開発の爲めに一身を捧げようといふやうなことを話合つたことがある。」

明治時代の東北地方出身者には内ヶ崎や吉野のみならずキリスト教徒が多く見られる。とりわけ仙台には多くのキリスト教系学校が創立され、多くの宣教師が来日した。内ヶ崎は吉野、小山との議論の中で東北地方を英国のスコットランドになぞらえ、東北出身者は経済力は及ばないが日本の精神文明の原動力となるべきだと主張し

内ヶ崎の活動歴を俯瞰してみると大きく五つに分けることができると思われる。それは(一)故郷仙台時代、(二)東京帝国大学在学中からオクスフォード留学中まで、キリスト教本郷教会の機関誌「新人」に多くの文章を投稿した時代、(三)帰国後「六合雑誌」の主筆を務めた時代、(四)「六合雑誌」廃刊後、政界に入るまで多く寄稿した「中央公論」時代、(五)衆議院議員当選後の政界時代である。以下時代を追って概観してみたい。⁽⁶⁾

内ヶ崎は明治十(一八七七)年四月八日、宮城県黒川郡富谷村に生まれた。旧制二高に入学した内ヶ崎は島地雷夢⁽⁷⁾、栗原基らと同級になり、土井晩翠を先輩に持った。明治二十八年秋頃になると、栗原の勧めにより尚綱女学校教師ミス・ブゼルのバイブル・クラスに出席し始める。このバイブル・クラスにしばらくして吉野作造、小山東助らが出席するようになったことは重要である。それはこの二人が内ヶ崎にとってかけがえのない友人となったためであり、彼らは内ヶ崎に対して非常に大きな影響を与えた人物であったからである。後年、内ヶ崎は小山の死に際し、「私は明治十年生、吉野君は十一年生、小山君は十二年生でありまして、吾々は三人何か特別の関係を有つて居るやうに考へられて居りますが、小山君は海の人、吉野君は平原の人であります。私は山の人であります。」と述べた後に吉野、小山が内ヶ崎にとって同郷の誼以上の関係であったことが示されている。

内ヶ崎は旧制二高在学中、三年間校友会雑誌「尚志会雑誌」の編集委員を務め、さらに卒業直前になって島地雷夢・吉野作造と共に、

たのである。

その議論において彼らは「我々三人が東北精神を代表して、日本の精神的開発の爲めに一身を捧げようといふやうなことを話合つた」とする。この吉野の回想からも、内ヶ崎の精神的基盤は吉野及び小山との交流関係から生れたものであるということが窺える。さらに吉野は「唯だ其の当時話合つた志だけは、兎も角も今日まで共に貫いて居る積りである。」と述べ、当時の三人の交流は、吉野においても大きな影響として心に残っていたようである。

また内ヶ崎は、明治三十三年に初めて「新人」に寄稿するようになり、大学院に進み早稲田大学の専任講師となる傍ら、明治三十七年には「新人」編集員の一人として奮闘することにもなった。

内ヶ崎の人生における一つの転機となったのは、明治四十一年から明治四十四年までの留学である。彼は英国オックスフォード大学マンチェスター学院に宗教研究のために留学するが、留学先からも「新人」や「早稲田学報」に投稿を続け精神的な活動を誌面で展開していた。ここで内ヶ崎は「日本では是れまでのやうな間に合はせぬ人物をのみ作つた日にはいくら実業が盛大になつても結局民族の大損失に候」と述べ、英国と比較し日本の教育が未だ途上の段階にあるということを書き記している。

内ヶ崎にとって英国留学の影響は非常に大きいと思われる。それはこの時期以後の評論を概観すると、日本について述べる際に殆どといっていいほど英国との比較において筆を進めているためである。さらに言えば内ヶ崎における英国の評価はほとんどが賞賛であり、

日本の有るべき姿は英国にあるという主張がしばしば散見される。例えば、英国の労働者に対する視点である。内ヶ崎は留学中、英国における労働者の見識が非常に高いものであり日本と比較して労働者層の中にインテリ層が存在する割合が高く、労働者にも関わらず日本のことについて自分よりも詳しく知っていることに驚きを示している。かかる経験は内ヶ崎に英国の評価だけではなく、労働運動への目覚めも与えたということが言えよう。内ヶ崎が政治に目覚めをきっかけも与えたといはこの時期だったのかもしれない。

明治四十四年六月、内ヶ崎は早稲田大学教授に就任し、帰国後は東京三田の統一基督教会の牧師に就任した。『六合雑誌』の主筆としてこの頃より大正十年の廃刊まで再び精力的に執筆活動をするようになったのである。「宗教家内ヶ崎作三郎」の全盛時代といえよう。

また内ヶ崎は「自分がやったことは、宗教と教育である」と述べているが、彼は日本にキリスト教を根付かせるためには、日本古来の祖先記念の風習をうまく取り入れる必要があり、キリスト教徒も祖先を敬うという精神を理解しなければならぬと述べた。ここにおいて西洋文明と日本文化との接点は既に行われていたと言える。内ヶ崎は、キリスト教徒の中に「祖先崇拜は全然基督教の勢力を専らにする欧米各国民の間に存在せざるを主張」する者がいるが、それは誤りであり「祖先記念の風は厳然と存在す」と指摘する。なかでも、祖先が栽培した樹木を保存するイギリスの風習は日本よりも優っていると述べ、「口に祖先崇拜を唱ふる我國に於ては祖先の紀

議員選挙に憲政会より立候補し、初当選を果たした。ここに「政治家内ヶ崎作三郎」が始まる。執筆活動も政党の機関誌に移行し政治評論がしばしば見られるようになる。以後、昭和戦前期、議会の有力政党で憲政会の後身ともいえる民政党に所属し当選を重ねその幹部となり、政党解散後は大政翼賛会に入会し、昭和十六年十二月、衆議院副議長に選出され、終戦まで副議長を務めた。そして昭和二十二年二月、東京に於いて死去した。

以上のように、内ヶ崎作三郎は青春時代に仙台でキリスト教の洗礼を受けたことからその生涯を布教と教育に捧げた。また、ともにキリスト教徒であった政治学者吉野作造や政治家小山東助の影響もあって、形而上の宗教世界にとどまらず現実の政治世界にも関心を抱いた人物であったということが出来る。このことは、内ヶ崎が明治天皇崩御および乃木大将殉死に際しこれを積極的に取り上げる姿勢を示すとともに、キリスト教の原理にとらわれない視点と解釈を施していたことと少なからぬ関係があると思われる。

二二 ユニテリアン派と『六合雑誌』

前章では内ヶ崎の生涯を追いながら、彼のキリスト教観が日本の伝統的文化との融合を考慮するものであったことを明らかにしたが、こうした彼の姿勢がキリスト教原理主義の立場からは必ずしも認容できるものではなかったであろうことが推測できる。本章においては、内ヶ崎がかかるキリスト教観を抱いた背景として、内ヶ崎の属

念物を重んぜざる場合多くして、黙して之を行ふ英国に於て反対の現象をみるは面白い対照ではないか。」としている。祖先を崇拜するという行為は万国共通の価値観であり、東洋独特の行為であるからといって否定するようなことはなかったのである。内ヶ崎自身も示唆しているように、キリスト教徒の中には祖先崇拜をして偶像崇拜に繋がるものであり、神の教えに背くと考える者がいたことに鑑みると、キリスト教徒である彼が祖先崇拜を正面に掲げ、これを独自の解釈を加えながら全面的に肯定していることは注目に値しよう。しかも、その祖先崇拜は、一般論として語られているのではなく、より具体的に日本的なものであった。すなわち、この論説の中で内ヶ崎は「我國は靖国神社と招魂社とを以て誇る。殉国の戦士を記念するは至当なることである。然れども欧米に於てこの風全くなきに非ず。」と述べ、アメリカにおいて戦死者の墓に詣でる花飾の日に

ついて紹介し、「天眞の情を流露する点」において日本の招魂社と同様のものであると明言している。このように内ヶ崎は自らキリスト教徒であるにもかかわらず、招魂社に理解を示すだけではなく、神社は宗教機関ではないとの解釈を示しながら、日本の文化を積極的に肯定していったのである。そこにはキリスト教と日本文化との軋轢の痕跡は窺われない。彼は、原理にとらわれたキリスト教ではなく、日本の風土に融合するキリスト教解釈を施しながらこれを受け容れていたのである。

内ヶ崎は『六合雑誌』廃刊後は、『中央公論』を中心として宗教、教育のみならず政治も論じ、大正十三年五月には、第十五回衆議院

していたキリスト教のユニテリアン派がいかなるものであったのかを検討したい。

まずユニテリアンが我が国に紹介されたのは、明治二十年五月に矢野文雄が郵便報知新聞において「ユニテリアン教の要領」の中でイギリスのユニテリアン教徒の信仰を明らかにしたことに始まるといわれる。矢野は英国ユニテリアン協会から、同紙に送られてきた「ユニテリアン耶穌教徒に関する教義の公布書」をもとにユニテリアニズムを紹介している。その内容は、ユニテリアン教徒はイエス・キリストを神とする三位一体説をとらないこと、人間は生まれながらにして腐敗しているとは見ない、また善行をなす力を持たない存在であるとはしないこと、聖書の一字一句全てが天の詞であるとはしないことなどである。このことからわかるように、ユニテリアニズムはキリスト教の中でも聖書にとらわれない柔軟な姿勢を持った宗教であるといえる。また矢野は慶應義塾出身であり、明治二十年アメリカのユニテリアン協会宣教師ナップの来日には福沢諭吉が関与していることが明らかになっている。ナップは同年十二月二十一日に来日したが、十月の段階で福沢はアメリカ留学中の息子一太郎にナップと会談するよう申し付けている。さらに福沢は明治二十一年一月にナップ夫妻を自宅に招き晩餐会を催したり、慶應系の団体交詢社で講演させたりし、明治二十三年にナップが帰国するまで交友を保った。宗教に関してどちらかといえば冷淡であったといわれる福沢がユニテリアン宣教師に便宜を図ったという事実は、ユニテリアニズムが福沢の受容しうるものであったことこの証左であ

らう。

明治二十三年三月、ユニテリアン協会の機関誌として『ゆにてりあん』が創刊された。その後雑誌名は「宗教」に変わり、仏教徒もユニテリアン協会に参加するようになるなど、キリスト教色が希薄化した。次第に宗教研究の機関となつていつたユニテリアン協会は、安部磯雄を中心に日本の社会主義運動の拠点となる活動を行うようになり、明治三十一年からは「六合雑誌」を「宗教」と合併させて論壇にも影響を与えるようになった。かくして「六合雑誌」は明治四十五年の段階において、前年牧師兼編集者となつた内ヶ崎を中心としてユニテリアニズムの布教と同時に論壇にも影響を与える「文芸宗教雑誌」となったのである。

また大正元年における統一教会(ユニテリアン派)の広告を見ると、多くの偉人がユニテリアンだつたということが紹介され、ユニテリアンは「迷信でない新しい宗教」であると宣伝している。また、「六合雑誌」の誌面中に掲げられた「東京ユニテリアン教会綱領」によれば、その第三に「吾人は他の宗教の裡にも亦真理を含有することを承認し寛容の精神を以て之れに對せんことを期す」とあり、他宗派にも寛容な態度をとることをその目標として掲げている。以上のことから鑑みるに、ユニテリアン派の特徴として「寛容性」ということも挙げられるだろう。

このように現実的な教義、宗教に冷淡であつた福沢が認めたこと、他宗派への寛容性の強調などからも分かるように、ユニテリアンは「正統派」キリスト教とは異なる姿勢をとつていたことが窺われる。

現実の人間社会で生活をしてきた「大人格」者として理解されていくのである。

内ヶ崎における信仰の告白から、彼にとつてのユニテリアンがいかなるものかを読み取れよう。それは第一に、聖書は「詩的」な言葉であつて、文字通りに読み取るような解釈はしないということである。第二に、イエスの存在は神憑りのものではなく、人格の優れた「歴史的人物」であつたことを日露戦争になぞらえながら示している。こうした事実は、内ヶ崎が宗教の世界にとどまらず広く世俗の現実社会に目を向け、キリスト教原理にとらわれないことのない宗教家であつたことを窺わせている。

四 「六合雑誌」に見る明治天皇崩御

前章までの考察により、内ヶ崎作三郎を中心とするキリスト教ユニテリアン派の実態を明らかにした。本章においては、明治天皇崩御に対する「六合雑誌」の反応がいかなるものであつたかを明らかに明らかにしていきたい。

明治四十五年七月三十日、明治天皇が崩御した²⁶。内ヶ崎は八月中、郷里の宮城に帰郷する予定であつたが、「図らずも先帝陛下の御崩御の事がありましたので、滞郷旬日の後すぐさま東京に引きかへし、毎日曜統一教会の教壇に立つて、諒闇に籠れる国民の自覚を促されつ、あつた²⁷という。彼は崩御直後に発行された「六合雑誌」三八〇号の口絵解題の中で、バリの東部墓地にある、バルトロメーによ

それでは、内ヶ崎自身はユニテリアンをどのように見ていたのだろうか。彼はオクスフォード留学から帰国後、まもなく統一基督教の牧師となる。ここで明治四十四年九月、彼はキリスト教に関する信仰を告白する説教を行った。まず彼は、キリスト教の中心思想は「神に対する吾等の信念と態度」であると述べた²⁸。さらに神とは何ぞやという問いに對しては、「實際私は不完全なる言語を以て神を説明することが出来ない。説明することが出来ないからして神である。」と禪問答の如き説教をしている。さらに、有神論の根拠がどこにあるかという問いに對しては「それは人間の意識の中にあると答へたい」と、あくまで主体を人間に置いて示している²⁹。また創世紀の「最初に神天地を造り給へり」という表現に對しては、「それは詩的の言葉であ」と述べており、このことから内ヶ崎がキリスト教の原理にとらわれない、すなわち聖書の言葉を文字通りに解釈することはしない宗教観を持っていることがうかがえる³⁰。内ヶ崎のイエス観もまた、この説教中において明らかにされている³¹。内ヶ崎は、イエスによる伝導の区域と年月は極めて微少であつたものの、彼の教訓は「人生胸奥の最深の事実に触れた」ものであつたとした上で、これを日露戦争における旅順口背後の二〇三高地の戦いになぞらえている。すなわち、二〇三高地という平凡な丘陵の戦いが日露戦争の終局に大きな影響を及ぼしたように、キリスト教会は「この「渡辺注」イエスの」大人格の感化によつて成立し、後世の教会改革者はその生命の源泉を常にこの大人格に求めた」のであつたという。内ヶ崎においてイエスは「超自然的人間」ではなく、

「死せる人々の碑」を「最大の芸術品」であり、「死によりて再会の機会を興へられたる一族の静黙なる歡喜を示す」ものとしたうえで、明治天皇崩御について以下のように言及する。すなわち、「一天万乗の君も死の手を免れ給ふこと能はず、諒闇中の国民は悲哀し又慟哭す。吾人は恐怖を以て或は希望を以てこの教訓を受けつつありや。千八百九十四年より四星霜の刻苦を経たるバルトロメーの大芸術は目下の吾人に何等かの光明を興ふことを信ぜんとす³²」としている。内ヶ崎は「一天万乗の君」でさえも死は免れ得ないがその業績は時代を超えて永遠である旨を示唆し、彼の明治天皇に對する少なからぬ敬意を窺わしていた。

さらに三八〇号の冒頭を飾る論文として、内ヶ崎は「天佑の明治日本」という論説を記した³³。このなかで彼は、明治天皇に言及する前に江戸時代および幕末、明治時代がどのような時代であつたかを明らかにした上で、明治時代においては列強の圧迫が日に日に甚だしく挙国一致の体制が必要な時代であつたと述べる。さらに彼は明治時代について以下のように考察している。

「大行天皇の治下に日本民族が盡し得たる開国進取の努力、及び國運の發展は、未だ世界の史上に比類なき大現象である。今、國を挙げて諒闇の裡に在るの日、殊に先帝の鴻業を追懐し奉り、偉大なる先皇の帝徳と、多望なる日東帝國の使命とを想ふは臣子の情である。而して吾等が過古四十五年の帝國の發展を懐ふ時、吾等はそこに何物とも知れず、靈妙なる天地神明の加護を想起せざるを得ない。」右の論からは、内ヶ崎が明治という一つの時代を世界史上稀に見

る発展を遂げた時代であると思ふ以上で、その時代の中で明治天皇を「偉大なる」存在と位置付け、その発展も天皇の「鴻業」によるところ大であると考へていたことがわかる。したがって、内ヶ崎は明治天皇治下の鴻業をあげ、「憲法の発布、ことに信教の自由を國民に與へ給ひたる、帝國議會の開設、日清日露二大戦争の勝利等いづれか日本民にとつて天佑豊かなり証左ではなかつたか」とする。

また、この主張の中で言及されているように、明治天皇の治世には大日本帝國憲法の制定や議會の開設、日清日露の勝利だけでなく、信教の自由が与えられたことも世界に誇るべきこととしてしている。江戸幕府による禁教政策が長く続き、キリスト教徒が社会から排除されてきたことを鑑みれば、キリスト教徒である内ヶ崎がかかる考えを持つことに不思議はないであろう。さらに内ヶ崎は明治天皇の帝徳を「吾等は最後に明治天皇の帝徳を讃へなければならぬ。皇祖皇宗の御遺徳の加護もさることながら、天資英邁に座せられし先帝が、常に嚴然の裡、功臣をして充分自己の材能を發揮せしめ給ひし御徳のほど、全世界帝王多しと雖ども、明治天皇に比すべき帝王のありとも思はれぬのである」と称えた。

このように彼は明治天皇を世界に比類なき帝王であると、最大限の讃辭を与えていたのである。皇室における儀式はいわゆる神道形式であり、異教徒である内ヶ崎が明治天皇を最大限の讃辭をもつてたたえることに矛盾を感じなかつたのだからかという疑問が湧く。しかし、少なくとも内ヶ崎のかかる反応を見る限り、キリスト教徒

以上のように、内ヶ崎は明治天皇崩御に際し「六合雜誌」上で明治天皇の帝徳を称え、「大和民族」は「精神的新日本」を建設しなければならぬとまで主張した。また彼は明治天皇に積極的な評価を与えているが、それは「臣子の情」であり、かかる偉大な皇帝を戴いた大和民族は「天佑」であると表し、キリスト教徒としての精神的葛藤の痕跡を窺うことはできない。

また三八〇号に於ける明治天皇関連記事は、内ヶ崎以外の論者によるものも存在するが、その中に批判的に捉えたものは存在しない。むしろ内ヶ崎周辺の人々（キリスト教徒や労働運動家を中心）が明治天皇崩御を受けて、大きな時代の転換点が訪れていると強く感じたであろうことは想像に難くないところである。

五 「六合雜誌」に見る乃木大将殉死

前章においては、内ヶ崎作三郎が明治天皇崩御に際しその業績を積極的に讃美したことを明らかにした。しかしながら、明治天皇崩御に対する記事が「六合雜誌」三八〇号の中心テーマとなっていたわけではない。これに対し、その後起こった乃木大将殉死事件、すなわち大正元年九月十三日、明治天皇大喪の礼を待って陸軍大将乃木希典が殉死したことに対する「六合雜誌」の反応は、特集と呼ぶにふさわしいほどの取り上げ方であった。本章においては、この極めて日本的な行為である「殉死」事件に関して「六合雜誌」がいかなる反応を示したか、さらにはそこから窺われる内ヶ崎の編集意図

としての属性よりも日本人としての属性が優越していたと見ることでできるだろう。続けて、内ヶ崎は来るべき大正時代のビジョンを示す。すなわち、「先帝の御心を懐ひ奉る時、天佑豊かなりし明治日本を回顧する時、吾人は無限なる神の恩寵が過古に於て大和民族の上に加はりし事を見、来るべき大正の日本に於て、その恩寵が更に大なるべきことを信じ。益々向上して精神的新日本を建設せなければならぬ。これ天佑に謝すべき大和民族の大なる責任である」としている。

以上のような表現から分かるように、内ヶ崎は「大和民族」という言葉を殊更用いながらその誇りを強く抱くと同時に、新時代において「精神的新日本」を建設すべきことを説いている。また文章全体を通じ、内ヶ崎自身の「宗教的直覚」から判断して、明治天皇を戴いた明治の我が国は「天佑」であつたとの主張が展開されていたのである。

また、「六合雜誌」上においては、「天佑の明治日本」に続いて、明治天皇御製の和歌が紹介されているが、これもまた明治天皇によって日露戦争中に詠まれた歌がルーズベルト大統領の感動を呼び、日露仲裁談判を生ぜしめたという「帝徳」の賞賛を表しているものである。また同誌の上では、日本基督教教会同盟会による明治天皇への弔詞、明治神宮建設協議会の概要なども掲載された。前者は「臣等」が信教の自由を享けたことに感謝する旨の弔詞であり、後者は明治神宮の建設地、予算など八項目にわたる覚書が決定された事実を報じるものであつたが、そのことに対する批判は見られない。

を考察してみたい。

まず、乃木大将殉死に関し「六合雜誌」はコラムの形で、その死を解釈するにつき「二個の面白きコントラスト」があると述べている。官僚派は「単に大将の純忠至誠に基く殉死なり」とし、非官僚派は「殉死に加ふるに憤死なり」としているとする。続けてコラムは「いづれにもあれ、偉人の死をして空しうせしめざらんは、生き残れる國民の重大な責任である。」とする。ここでは官僚派の主張および非官僚派の主張を紹介しているが、いずれも乃木大将の殉死そのものを批判するニュアンスは描かれていない。

さらに「六合雜誌」の中心メンバーである三並良は「唯だ大将の精神に同情したい」とし、また加藤は「近頃、日本の思想界に於て、乃木大将の死程、深刻な感動を、与えたものはまたとあるまい。軍人嫌いの余でさへ近頃ない感動を覚えた」と述べた上で、「余は大将の死によつて、頑迷なるキリスト信者の自殺絶対非認論の覆らんことを希望する。また、殉死の古風を笑ふ軽薄なる心に、火のバプテスマの下らんことを願ふ。」としている。さらに中野柏葉は「キリスト教では自殺を絶対的に排斥するのだと云ふ論者がある。果してさうであらうか。僕は之を知らぬ。」とする。

以上のことから「六合雜誌」においては、本来自殺を認めないはずのキリスト教徒が日本的な価値観に基く乃木大将の行為を積極的に評価するとともに、自殺絶対非認論に立つキリスト教徒を「頑迷なる基督信者」という言葉まで用い、批判していることがわかる。

乃木大将の殉死を積極的に評価する論は、「六合雜誌」三八二号

にも続く。加藤玄智は内ヶ崎に依頼されて仏教の生死観について論じ、釈迦は「精神上の不死を求めんければならぬと云ふことを大悟徹底されたのである。」とし、「私利私欲のきたない念慮を断つた状態」こそが釈迦の悟りとした。加藤は乃木に関連した言及をしてはいないが、「肉体的物質的の不死以上に、もつと大なる不死のあると云ふことを知らなければならぬ」とし、乃木の殉死への肯定的評価を暗示させていた。

また高木十太郎は自殺そのものには賛成しないが「我々は將軍の死を以て武士道の最後を飾れるものとなし、深く其の心事に同情し、謹で之に敬意を払」うとし、乃木の殉死を「武士道」の精神の発露と見做し肯定していた。「六合雜誌」の三八二号においては他にも世界の自殺観について考察を加えた論文が幾つか散見された。これらは、乃木大將の殉死に直接評価を与えるものではなく、自殺という行為は明治日本に限らず、時空を越えて存し、それをめぐり様々な自殺論が存在したことを紹介するものである。この内ヶ崎の編集意図は、宗教的論点となる自殺をテーマとする際、乃木大將の殉死と西洋における自殺を比較考量し、いくつかの生死観を提示しそれを読者に考えさせようということにあったのではないだろうか。しかし、様々な生死観をめぐる議論の中に乃木大將殉死を批判するものは見当たらなかった。

以上のことから、「六合雜誌」上における多くの論者の主張は以下のようにまとめることができる。まず、自殺を肯定することはしない。しかしながら、西洋キリスト教徒が主張するように自殺を絶

のは「非常な独断である」とし、「吾々は何時たりとも自己の最高理想の道德的要求の爲めには自殺もし、復た自ら進んで人に殺されるにも行くといふ決心がなければならぬ」とした。永井の表現から判断して、彼もまた「積極的自殺」である乃木將軍の殉死を評価すべきものとして認めるであろう。

しかしながら、全てのキリスト教徒が「六合雜誌」に見るような反応を示したわけではない。例えば、当時のキリスト教界の指導者と目されていた井深穉之助は日記において以下のように記して乃木大將殉死を批判的にとらえていた。

九月十三日においては、「(略)「大喪式出席の」帰途墓地ニテ号外荒ニ逢フ。買ツテ見レバ乃木大將夫婦ノ自刃ナリ。実ニ意外千萬悲惨ノ極ナレトモ実ニ困ツタ事ナリ。大ナル心得違ナリ。其ノ不健全ナル思想ノ現表ナリ。」とし、乃木大將殉死に不快感を表していた。さらに九月十七日には、「講堂ニ於テ乃木大將殉死ニ付講話ヲナス。キリスト教倫理ノ立場ヨリ判断スレバソノ非ナルコト勿論ナレトモ真ノ武士道ヨリ見テモ心得違ト云フベキナリ。殉死ノ弊ヲ今更論ズルマデモナシ。」と記している。井深は、「六合雜誌」上における多くの論者から見れば「頑迷なるキリスト信者」ということにならう。また、かかる事実は「六合雜誌」が、既存の教義を厳格に守るキリスト教徒とは一線を画した人々によって編まれた機関誌であったということを示している。

以上見られるように、乃木大將の殉死を受けて「六合雜誌」は「自殺」とはいかなるものなのかについての特集が組まれた。当時

対否定することはない。そこには、日本人の行動は日本人が解釈を行うべきとの思考が存在し、乃木大將の殉死のような場合は日本的な「自殺」であるとして、論者のほとんどが乃木大將殉死に同情的な評価を与えている。そして、こうした彼らの論説は内ヶ崎の編集意図に沿ったものであるとも言えよう。既述したように、内ヶ崎は精神的な文化を重視していた。内ヶ崎の直接的な記述は見られないものの、乃木大將殉死事件が彼の心の琴線に触れたことは想像に難くない。

ところで、乃木大將殉死を積極的に捉える論者のなかでも永井柳太郎の見解は注目に値する。まず彼によれば、「日本では恰も乃木將軍の自殺があつて、殆ど國民を挙げて無差別に自殺そのものを文明的行為であるかの如く賞賛し、それが爲めに思慮なき輩を誤ることからざるを憾とするのであるが故に、自殺に対する研究の必要は今日吾々をして一層痛切に感ぜしむるのである」とし、自殺を無条件に肯定することの危険に警告を發しつつも、自殺を「積極的自殺」と「消極的自殺」に区分し、次のように論じる。すなわち、永井は「積極的自殺」を「自己の最高の理想とする所に殉する自殺」と定義し、この種の自殺は決して咎めるべきではないとしている。乃木大將の死、タイタニック号船客の男性的死もこの意味における一種の自殺であるとしている。他方、「消極的自殺」は「退いて自己の苦痛を免れやうとすることに外ならぬ」として「人間の行為の中でも最も卑怯な方法である」としている。永井は二つの自殺を解説した上で、西洋人が自殺を絶対的な罪悪であるかのごとく考えた

「六合雜誌」の主筆であった内ヶ崎は、キリスト教徒のみならず仏教徒や学者などにも「自殺」についての論稿を依頼し論議の活性化を促した。紙面全体を通して乃木大將の殉死を積極的に評価する声が強く、西洋キリスト教徒の主張する自殺絶対否定論は受け入れられないとする主張がほとんどであった。内ヶ崎の乃木大將殉死観は詳らかではないが、主筆であり紙面の編集に強い影響力を持った内ヶ崎がかかる殉死を積極的に評価しなかったと考えることはできないであろう。

六 『近代人の信仰』に見る内ヶ崎の思想

内ヶ崎作三郎は大正二年六月に『近代人の信仰』(書醒社書店)という六〇〇頁を越える著作を世に送り出した。明治末期、英国留学中に書いた文章も含まれるなど、明治四十五年を挟んだ内ヶ崎の思想が現れていると考えられる。この書物において、内ヶ崎が強調した価値観を検証することによって、本稿のこれまでの考察を補完したい。

まず、「無意識の偉大」において、内ヶ崎はタイタニック号沈没が多くの教訓を与えたとする。「仰げば北大西洋の夜更けて、星の光牙え、海若また眠りて蕭條の風なく、人類科学の進歩はこの巨城を擁して大西洋を突破するのである。夜は静かであった。不沈没船を標榜したるタイタニック号は、今や科学全能を信じて安眠を貪れる幾千の船客を運びつ、大自然の威力を睥睨しつ、ある。」と述べ、

タイタニック号が人類科学の集大成であることを示している。そのタイタニック号が沈没したことに対して内ヶ崎は、「夫と共に海底に沈んだ健気な女」「全然義務の爲めに自己の生命を捨て、七百幾人の婦女子を救つた」人などを見て「吾人は実に麗しき天眞の流露、人性の發現を見た。」と評価する。

さらに、ボートに救助されたある男が救いを求める多くの叫びを聞いて「宜しい、諸君おさらば、神の恵み諸君の上にあれ」と叫んで北海の藻屑と消えた。これを内ヶ崎は「この無名の英雄的男子の覚悟は実に人性の真情を發露したものでないか。詩に見るよりも麗しい奥床しい心掛ではないか。これ実に心靈の勝利である。」と記している。このように内ヶ崎によってなされた、タイタニック号事件における「自己犠牲」の精神に対する評価は、先述の永井の見解に見られた乃木大将殉死の評価を類推させるものがある。

また、内ヶ崎は、歴史、とりわけ文明史に精通していたが、「近代人の信仰」に収められた論説を通じて、彼の思考の中に東洋対西洋という対立構図があることを垣間見ることが出来る。

まず、「靈的生命の反抗」において、内ヶ崎は東洋の時代が復活すると次に予言する。すなわち「今や東洋の天地は暗澹たる悲風と殺伐たる硝煙に埋つてゐる」としながらも、東洋人が各所で独立を要求していることを述べ、これは「欧州人の偏見を以て見れば、是れ將に來らんとする黃禍の前兆であらう」とする。しかしこの東洋の動きは「紀元前四世紀波斯の大軍がマラソンの戦いに敗れて以來二千三百年、倒れて立つ能はざりし東洋の元氣が、勃然とし

なる使命の爲めに努力すべきである。」とした。

ここで当時の時代背景を考えてみると、日本は日露戦争に勝利し、大國の仲間入りを果たしたと考えた日本人も多かった時である。また、日英同盟締結により列強と互角の力を持つたと考えるものがあったとしてもおかしくはない。しかし、内ヶ崎は日米摩擦もちらほら見えてくるほど日本が国力を増した時代になつても、以下のように述べ、日本を一等國とは見なさなかつた。すなわち、「日本はまだ第一等國に達してゐぬ。富と健康と學術とに於て、また道德生活の上に於てさへも、欧米の列強に後る、こと数歩のみではない。今は國民が列強競争の激烈なるを更に痛切に自覚すべき時である。奮勵すべき時である。而して國民全体の教養を高め、深め、大にして、眞個の大國民に進化せしむるために上下協力し、和合し、精進すべき時である。」とする。彼は欧米列強に対する競争意識を強烈に抱きながら、遅れた日本に精神的文明の時代を訪れさせるためには、國民の精進が一層必要であると鼓舞していたのである。

以上のように、内ヶ崎の文明観は、十九世紀までの西洋物質文明の時代はまもなく終わり、二十世紀においては東洋の精神文明が時代の主役であるというものであつた。なかでも彼は日露戦争の勝利を評価し、日本海海戦はマラソンの戦いに匹敵するとまで述べている。しかしその一方で、彼が抱く國際社会の現状認識は、あくまで「列強競争の激烈なる」時代であり、我が國は依然として欧米列強の後塵を拝しているとの認識であつた。これらの主張に共通するのは、内ヶ崎が東洋と西洋の差異を強く感じ、西洋に強いライバル意

て挙げたる復活の声ではあるまいか。」と、二千三百年もの間西洋に従属していた東洋が再び立ち上がる時が来たことを主張する。その上で、かかる東洋文明の目覚めは日露戦争の勝利が契機となつたと以下のように述べている。すなわち「而して二千年来眠りし東洋國民の爲めに万丈の氣焰を吐き、東洋國民の自覺心を形成したのは実に三十七八年の戦役に於ける奉天或は日本海々戦の殷々たる砲聲の響であつた。之を以て見れば、三十七八年の戦役は実にマラソンの戦に比すべき東西二洋の大戦であつた。かくて東洋文明は再び長夜の眠より醒めた」とする。この内ヶ崎の文章に見出される文明観には、東洋対西洋という図式があり日本は東洋における先駆者であるとの意識が窺われる。

内ヶ崎の場合、こうした東西対立の図式は、十八、十九世紀は西洋の「物質的文明時代」であり、二十世紀は東洋の「精神的文明時代」であるとの時代的位置づけを含むものであつた。彼は「今や東洋諸國民は先づ物質的文明に於て覺醒の時代に入つた。是れやがてまた精神的文明の覺醒を予言してゐるのではないか」と述べ、物質對精神の二項對立の図式を提示するとともに、物質文明の時代の後に精神文明の時代が到來することを説いていた。「生の力」の本質にみられる、明治と大正の位置付けも、右の如き西洋と東洋の對立図式を支える特徴付けを重ね合わせることに由り行つてゐる。すなわち、「明治の改革は物質的改革であつた。大正の改革は精神的改革でなければならぬ。外的文明に憧憬れたる吾等の眼を転じて、内的文明の核心に飛び込み、深遠なる思想の發展と、人類進化の大い

識を持つていたことであらう。

ところで内ヶ崎は宗教を生業としていたが、当時の内ヶ崎の根底に在るものを考察するためにも「近代人の信仰」における内ヶ崎の宗教観を検討したい。内ヶ崎にとつて宗教は、非常にわかりにくい理屈を言つて他宗派を悪く言うものであつてはならず、普遍的なものであるとした。例えば「宗教生活の芸術的内容」において、「宗教は根本原則に於て時代や國家や民族を超越し、千古に照し、万邦に亘りて不易の真理であり、活力である。」と述べ、四海兄弟主義を唱えている。また、「靈的生命の反抗」においては、「キリスト教が社会の進化發展を対岸の火災視し、依然として二千年以前のキリスト教を以て今代人の覺めたる頭に注入せんとしてをる。斯の如き保守的キリスト教が、吾人を満足せしめないのはもちろんのことである。」とし厳格な教義を守るキリスト教を、「保守的キリスト教」と見做しこれに批判を加えている。さらに「現代生活の權威」においては、「人生とは畢竟、科學的生活を意味するのであつて、宗教とは科學的生活と調和するものでなければならぬ。尚一步を進めて言へば、宗教は科學と共に進化するべき性質のものでなければならぬ。」と述べ、科學と矛盾しない宗教を唱えた。この点は、ユニテリアンがいかなるものであるかを見れば理解は容易である。

また、内ヶ崎は後年衆議院議員となり政界で活躍するが、この時代においても積極的に政治を論じようとしていた。「近代人の信仰」における内ヶ崎論説を見ると彼にとり宗教が政治と無縁なものではないことがわかる。例えば「政治の改革か心靈の覺醒か」において、

内ヶ崎は桂太郎の新政党組織に批判を加え、宗教者の立場より政治を論じるとしながら、「宗教が理想の建設、生命の促進といふが如き内的活動の根柢であり、政治や凡べての社会運動がその発現たるに過ぎざるを以て見れば、政治対宗教の問題は極めて密接なものであつて、政治の根柢は宗教の所謂精神生活に彩色せられたる者でなければならぬ。」と述べた上で、「一体形而上学的事象と雖ども実社会の実存在を離れて絶対的に独立し得るものでない。」と主張していた。宗教が基礎ではあるものの、その宗教の世界は政治の世界と全くはなれたものではなく、宗教は実社会と遊離したものであつてはならないというのが内ヶ崎の主張である。これは内ヶ崎が現実を直視した人間であることを表すと同時に、後年政治家になる人物の萌芽がここに見られるとも言えよう。

以上見たように、大正二年に発行された内ヶ崎作三郎の著作『近代人の信仰』は、以下の点で内ヶ崎の明治天皇崩御観を理解する際の一助となる。

第一に、東洋対西洋という文明の対立構図と、これに支えられた時代認識である。それは、十九世紀まで続いてきた西洋の物質文明時代が、二十世紀になって日本など東洋諸国の勃興により精神文明時代にとってかわるとの予測を含むものであつたが、そこには西洋に強い対抗意識を持ちつつ、その軸足をあくまで東洋、とりわけ日本に置き、かかる時代の到来に向けその精神を鼓舞する姿勢を読み取ることができた。

第二には、内ヶ崎の宗教観は政治と密接な関連を持ち、どちらから

一方だけの世界であつてはならないと主張したことである。宗教は形而上の世界ではあるが、現実社会から超越して存在することはできないとの認識を基盤としている。すなわち、内ヶ崎は、現実存在する日本の社会と遊離したキリスト教を暗に批判しているのである。これは、西洋文明の象徴としてのキリスト教をそのまま日本に輸入するのではなく、日本の風土に合わせて現実的に解釈していいという内ヶ崎の姿勢を生み出したといえる。そして彼が明治天皇崩御に際して示したように本来のキリスト教徒としての属性よりも日本人としての属性を優先させたことは右の姿勢と無関係ではないであらう。

七 結 語

キリスト教徒であつた内ヶ崎作三郎は明治天皇崩御に際し、自ら主筆を務めるキリスト教ユニテリアン派の機関誌『六合雑誌』において明治天皇の業績を称えた。続く乃木大将の殉死という事件を受けて『六合雑誌』は特集を組み、自殺についての論稿が数多く掲載されたが、その内容は乃木大将の殉死を積極的な自殺であり武士道の表われであるとして高く評価する論説で占められた。

本来自殺を絶対的に認めないはずのキリスト教徒たちが乃木大将の殉死を高く評価したことは、『六合雑誌』を発行する統一基督教会(ユニテリアン派)が、その設立に福沢諭吉が関与していることから分かるように、他の原理的なキリスト教徒と異なり三位一体説

を信じないという現実的な教義を採つていたことに原因がある。また、『六合雑誌』に関わつていた内ヶ崎の友人、吉野作造や小山東助、永井柳太郎は宗教のみならず現実の社会問題に関心のあつた人物であつた。彼らの影響から内ヶ崎及び『六合雑誌』が宗教の世界にとどまらず広く政治の世界との関わりを持つ思考を持つにいたつたのであると言えるのではないか。

また、大正二年に発行された内ヶ崎作三郎の著作『近代人の信仰』は、本稿の主題を補完する資料であるといえる。なかでも特徴的な点は、この著作全般に見られる東洋対西洋の文明対立という視点である。内ヶ崎によれば、十九世紀までの世界は、西洋の物質文明であつた。ところが、二十世紀に入って東洋の諸民族が独立の動きを示し始めた。さらに日本が日本海海戦でロシアに勝利したことなどから、二十世紀は東洋の精神文明時代であるという主張を展開している。そこには、キリスト教徒ではありながらも東洋あるいは日本に軸足を置いた、西洋に対する強い対抗意識を見出すことができる。かかる対抗意識は、内ヶ崎を中心とするキリスト教徒が西洋的価値観に拘泥されることなく、自分の周囲に存在する日本の価値観を重視し、西洋対東洋の二者択一の中で後者を選ぶことをよしとすることにつながつた。そのために彼を中心とする人々は、西洋文明のキリスト教を受け容れながらも、日本的価値観と対峙した際には、独特の解釈を施しながらこれを肯定していったのである。

明治天皇崩御という事件は、これを契機に薩長藩閥の影響力が低下していくという点で、近代日本政治史上における大きな転換点で

あつた。明治という国家の隆盛期を経験した後の日本は、制度上、文化上、あるいは産業上においても、西洋文明を十分に吸収し、欧米中心の国際政治という舞台にも踊り出るまでに成長を遂げていた。続く大正時代には「大正デモクラシー時代」が訪れる。この時代も西洋文明の大きな影響を受けた結果であると位置づけることができよう。しかし、一方で日本人はその後ナショナリズムを高揚させ、昭和時代は戦争の時代になっていく。

以上の時代背景を踏まえた上で、内ヶ崎作三郎が明治天皇崩御時および乃木大将殉死時に示した反応を考えると、それは西洋文明と日本的価値観の邂逅に際して日本人が採つた思考様式の一事例としてだけでなく、その後の昭和戦前中期の我が国の思想的展開を理解する一助にもなるのではないだろうか。すなわち、昭和期に多く見られる一種のアジア主義とも思想的近似性を持ち、さらに、彼の東洋対西洋の対立図式およびその背後に存在する西洋への対抗意識は、戦中期に日本を席卷する「東亜新秩序」、「大東亜共栄圏」の理想を根底において支え、突き動かす思考様式でもあつたと指摘することもできる。

(1) 明治四十五年当時の『六合雑誌』は、キリスト教ユニテリアン派統一基督教会の機関誌的存在であり、オクスフォード大学留学中にユニテリアンとなつた内ヶ崎作三郎が牧師兼編集者となつて宗教的自由主義を唱えた。ユニテリアンについては、鈴木範久「明治宗教思潮の研究——宗教学事始——」(『東京大学出版会』一九七九年)四四―六四頁)を参照。

- (2) 大正時代を通しての寄稿者として、吉野作造、新渡戸稲造、鈴木文治、安部磯雄などがあげられる。主な寄稿者がキリスト教徒であったこともまた事実である。
- (3) 竹中正夫「内ヶ崎作三郎における人間と文化」(同志社大学人文科学研究所叢書 XVIII・「六合雑誌」の研究)〈教文館、一九八四年〉。
- (4) 内ヶ崎作三郎に関する既存研究は少ない。これは戦災によって内ヶ崎の自宅が焼失し、二十万冊といわれる蔵書など内ヶ崎に関する一次資料が滅失してしまったためであるといわれる。
- (5) 「新人」は本郷教会の月刊機関誌。内ヶ崎は本郷教会の牧師である海老名弾正の影響を受けて、明治三十五年本郷教会に通うようになった(小野寺宏「愛天内ヶ崎作三郎資料」〈第三集、平成八年〉)。また、吉馴明子「海老名弾正の政治思想」(東京大学出版会、一九八二年)によれば、内ヶ崎が師事した海老名は「キリスト教を欧米文明から剥離して日本の伝統的宗教と接合した」人物であると述べている。したがって、日本の価値観を否定しないキリスト教徒である内ヶ崎を生み出した大きな要因の一つとして海老名の教えをあげることができよう。
- (6) 「議会制度百年史・衆議院議員名鑑」(大蔵省印刷局、平成二年)九三頁、小野寺宏「愛天内ヶ崎作三郎資料」(第一集、第二集、平成七年・平成八年)を参照。
- (7) 浄土真宗の著名な僧である島地黙雷の子である。
- (8) 穴戸慶子「アンネ・S・ブゼル著『バイブル・クラス物語』」および和敬子「『六合雑誌』とA・S・ブゼルの弟子たち」(いずれも大正デモクラシー研究会編「大正デモクラシー研究2」(一九九六年)の両論文にバイブル・クラスのメンバーが内ヶ崎に大きな影響を与えたことを論じている。
- (9) 明治十二年宮城県気仙沼町出身の政治家、評論家。号の鼎浦は、気

- 仙沼湾の古名にちなんだもの。少年の頃、代議士島田三郎の政談演説を聞き、政治家を志す。中学(仙台一中)の上級に吉野作造がおり、また第二高等学校の同窓に内ヶ崎作三郎がいて、この二人とは死ぬまで交友関係を保った。明治三十六年東京帝国大学哲学科を卒業。東京毎日新聞記者、早稲田大学講師、関西学院文科学長、横浜貿易新報主筆を経て大正四年衆議院議員に初当選。当選二回を数えるも大正八年、三十九歳で死去(河北新報社編「宮城県百科事典」(河北新報社、昭和五十七年)一五八頁、「議会制度百年史・衆議院議員名鑑」(大蔵省印刷局、平成二年)一六頁、西田耕三編「鼎浦小山東助の思想と生涯」(鼎浦小山東助顕彰会、昭和五十四年)を参照)。
- (10) 内ヶ崎作三郎「小山鼎浦の宗教思想」(「六合雑誌」、大正八年十二月)を参照。
- (11) 「新人」(二十巻十号、大正八年十月)。小山東助の死に際して吉野が書いた追悼文である。
- (12) 同右、「新人」(二十巻十号、大正八年十月)。
- (13) 同右、「新人」(二十巻十号、大正八年十月)。
- (14) 内ヶ崎作三郎「英国便り」(早稲田学報、明治四十二年二月)を参照。
- (15) 内ヶ崎作三郎「見識ある英国の労働者」(「友愛新報」(大正三年五月十五日、友愛新報社)を参照。この記事は、総同盟五十年史刊行委員会編「友愛新報集成—大正昭和労働運動社会主義研究資料—」(柏書房、一九六四年)を参照した。
- (16) 友愛会を設立した鈴木文治もまた宮城県出身であり、この頃鈴木も「六合雑誌」の編集に関与していた。尚、「友愛新報」は鈴木文治が設立した我が国労働組合の先駆、友愛会の機関誌であり、主として全国各地の労働運動家に読まれた。この頃、鈴木文治は内ヶ崎の秘書を務

- めていた(前掲、「明治宗教思潮の研究—宗教学事始—」六二頁を参照)。
- (17) 小野寺宏「愛天内ヶ崎作三郎資料」第四集(平成八年)を参照。
- (18) 内ヶ崎作三郎「欧米に於ける祖先記念の風習」(「六合雑誌」、明治四十五年二月)を参照。
- (19) 同右「欧米に於ける祖先記念の風習」。
- (20) 同右「欧米に於ける祖先記念の風習」。ここで内ヶ崎は「日本の神社は宗教の機関にあらずして祖先崇拜の場所に過ぎぬ」としている。
- (21) 初当選を果たした内ヶ崎は早速「改造」に寄稿し、護憲三派内閣の成立を訴えると同時に「現下の政情が大に英国最近の政情に類似してゐる」とし英国の労働党の台頭を憲政会の勝利になぞらえた(内ヶ崎作三郎「総選挙と護憲内閣の前途—政局の将来—」(「改造」、大正十三年六月)。
- (22) 昭和五年第十七回総選挙に落選するが、翌年補欠選挙で当選する。昭和十二年六月には、第一次近衛文麿内閣の文部政務次官、昭和十四年四月には、民政党総務・幹事長に就任した。昭和十五年八月には、大政翼賛会に入会した(前掲、「議会制度百年史・衆議院議員名鑑」九三頁および前掲、「愛天内ヶ崎作三郎資料」〈第一集、第二集〉を参照)。
- (23) 「ユニテリアン教の要領」(郵便報知新聞、明治二十年五月七日、八日、十日)を参照。
- (24) 前掲、「明治宗教思潮の研究—宗教学事始—」、四七一—五〇頁。
- (25) 「今度ユニテリアンの僧にてナップと申人日本へ参候に付、其出発前、日本の言語風俗を取調度に付、貴様が其家へ参るべきよし」(「福沢諭吉全集」第十八巻〈岩波書店、昭和三十七年初版、昭和四十六年再版〉一七二頁。明治二十年十月十三日付福沢一太郎宛書簡。なお、この資料は「明治宗教思潮の研究—宗教学事始—」において明ら

- かにされている。
- (26) 前掲、「明治宗教思潮の研究—宗教学事始—」、四九頁。
- (27) 「友愛新報」の広告においてこのように自称している。例えば、前掲「友愛新報」(大正元年十二月三日)を参照。
- (28) 「古来の大偉人を視ますと、大要に統一基督教(渡辺注:ユニテリアン)の人々が多い。ナイチンゲール、フランクリン、エマソンなど皆なユニテリアンであつたのを見ても分る」。(前掲、「友愛新報」(大正元年十二月三日)。
- (29) 「東京ユニテリアン教会綱領」(「六合雑誌」三六九号、明治四十四年十月)を参照。
- (30) 内ヶ崎作三郎「我が信仰の告白」(「六合雑誌」三六九号、明治四十四年十月)を参照。表題には「九月二十四日東京ゆにてりあん教会に於ける説教」と付記されている。
- (31) 同右、「我が信仰の告白」(一)を参照。
- (32) 同右、「我が信仰の告白」(二)を参照。
- (33) 同右、「我が信仰の告白」(三)を参照。
- (34) 内ヶ崎作三郎「我が信仰の告白」(承前)、「六合雑誌」三七〇号、明治四十四年十一月)を参照。
- (35) 同右、「我が信仰の告白」(承前)を参照。
- (36) 「崩御前後」(「六合雑誌」三八〇号、大正元年九月)に詳述。この記事は「大行天皇の崩御は、我等国民の哀痛悲嘆極まり」という文章に始まり、「茲に国民の至誠は疑つて未曾有の宗教的發現となりぬ。」と述べて、崩御の日における明治天皇の「御容態」を詳細に記録している。また、「明治天皇」との御追号がなされたことも報じている。
- (37) 小僧記「編集余録」(「六合雑誌」三八〇号、大正元年九月)。
- (38) 内ヶ崎作三郎「バルトロメーの宗教的大芸術」(「六合雑誌」三八〇

号、大正元年九月。

(39) 内ヶ崎作三郎「天佑の明治日本」(『六合雑誌』三八〇号、大正元年九月)。

(40) 同右「天佑の明治日本」。

(41) 同右「天佑の明治日本」。

(42) 同右「天佑の明治日本」。

(43) 明治天皇の御製は「四方の海みなはらからと思ふ世に」など波風の立ちさわぐらん」である。

(44) 「大喪と基教会」(『六合雑誌』三八〇号、大正元年九月)において、
弔詞が掲載された。そのなかには「大行天皇ノ聖徳天ノ如クノ聖恩海ノ如ク、臣等ノ隆治ノ下ニ在リテ文明ノ恩沢ニ浴シ信教ノ自由ヲ享ク、臣等感荷何ゾ堪ヘン、茲ニ大喪ニ会シ洵ニ恐懼ニ絶ヘズ、謹テ全国ニ於ケル基督教各派同盟ヲ代表シテ痛哭哀傷の微衷ヲ表シ奉ル。明治四十五年七月三十日ノ日本基督教各派同盟副会長ノ井深梶之助ノ小崎弘道」と記されている。

(45) 「明治神宮建設協議会」(『六合雑誌』三八〇号、大正元年九月)。
この記事に関しては事実報道のみであるが、決定された覚書を細かく掲載しており、「六合雑誌」として明治神宮建設に反対する記述は見られない。さらに、三八一号「編集局だより」において、編集委員は、明治神宮建設の議に言及した上で、「神宮建設以外に於て、果して更に世界的にして、更に適當なる施設はなきや。」と述べている(小僧「編集局だより」(『六合雑誌』三八一号、大正元年十月)を参照)。

(46) 皇紀二千六百年を迎えた際にも、内ヶ崎は民政党の機関紙において「明治天皇の不業は神武天皇の鴻業に次ぐべき皇國の一大飛躍にして、今日の我國發展の原動力となられたのである」と述べて、明治天皇をたたえている(内ヶ崎作三郎「皇紀二千六百年を迎へて我が党の使命

を想ふ」(『民政』、昭和十五年一月)。

(47) 例えば、野口精子は「大正の秋」と題して十首の和歌を書いており、皓天生「疑問の日本国民性」においても、明治天皇崩御に際して「平素宗教の宗の字すらも口にしたことのない人々が、急に熱心なる信者と早変わりし、其神体の如何をもさへも究めずして、馳せ参ずる人々の多かつたこと」に批判を加えているなど明治天皇崩御関連記事が多く見られる。尚、小野寺安「愛天内ヶ崎作三郎資料」第五集(平成十年)は、鈴木文治が内ヶ崎の号である「愛天」、吉野の号である「翔天」にあやかって「皓天」と称したということを示している。したがって、「疑問の日本国民性」は鈴木文治の評論であると見られる。

(48) 「乃木大将夫妻の殉死」(『六合雑誌』三八一号、大正元年十月)。

(49) 三並良(慶應元ノ昭和十五)は、明治から昭和時代前期にかけての自由キリスト教思想家でドイツ語学者。旧制一高の教授を務め、明治四十二年より「六合雑誌」の編集に携わる(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第十三巻(吉川弘文館、平成四年)を参照)。

(50) 三並良「乃木大将を哭す」(『六合雑誌』三八一号、大正元年十月)。

(51) 加藤「国家的悲劇の背景」(『六合雑誌』三八一号、大正元年十月)。

(52) 中野柏葉「キリスト教と自殺」(『六合雑誌』三八一号、大正元年十月)。

(53) 加藤安智「仏教の生死観」(『六合雑誌』三八一号、大正元年十一月)。
加藤安智(明治六ノ昭和四十)は明治から昭和時代にかけての宗教学者、神道学者。陸軍教授士官学校付・明治聖徳記念学会常務理事・同付属研究所長・東京帝国大学助教授・国学院大学教授などを歴任(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第三巻(吉川弘文館、昭和五十八年)を参照)。

(54) 高木壬太郎「自殺論」(『六合雑誌』三八二号、大正元年十一月)。

高木壬太郎(元治元ノ大正十)は明治・大正時代の神学者、教育家。教会牧師などを経て、明治四十一年、青山学院神学部専任教授、大正二年に青山学院院长に就任した。

(55) 山岸光宣「独逸近代劇に現はれたる自殺」、野村善兵衛「ストア哲学の自殺観」、藤井健治郎「自殺に関する西洋学者の意見」(『六合雑誌』三八二号、大正元年十一月)など。

(56) 永井は明治十四年生、東京都出身の政治家。明治四十四年小山東助らと共に統一基督教教会に入会している(『六合雑誌』三七二号、明治四十五年一月)。明治三十八年早稲田大学政治経済学部政治科卒。明治四十一年、マンチエスター・カレッジ(オクスフォード)卒。早稲田大学教授の傍ら雑誌「新日本」の主筆となった。加藤高明内閣、第一次若槻内閣の外務参与官、浜口内閣の外務政務次官、斎藤内閣の拓務大臣、第一次近衛内閣の通信大臣、阿部内閣の通信大臣兼鉄道大臣を歴任。また、北陸毎日新聞社長、日本放送電設立委員長、立憲民政党総務、幹事長、政務調査会長、大政翼賛会総務、東亜局長となる。当選八回。

(57) 永井柳太郎「統計学上より見たる自殺」(『六合雑誌』三八二号、大正元年十一月)。

(58) 永井はこの論文において「世の多くの人々が今日日本に行われてる自殺の多くが、如何なる性質のものであるかを究めずして、妄りに自殺そのものを以て武士道の発現なるが如く讚美するのを危険なりとする」と述べ、他の識者よりも冷静な判断を加えている。

(59) 井深梶之助は会津藩出身であり、明治四十五年当時、数え年五十九歳であった。明治学院総理、日本基督教青年会同盟委員長、基督教各教派同盟会長、日本基督教大会議長等の要職にあり、「文字通りのキリスト教会の指導者」であったという(工藤英一「社会思想的にみた明治天皇の死とキリスト教——井深梶之助の場合——」(『近代日

本社会思想史研究」(『教文館』一九八九年)を参照)。

(60) 工藤英一「社会思想的にみた明治天皇の死とキリスト教——井深梶之助の場合——」(前掲「近代日本社会思想史研究」、三三七頁)を参照。

(61) 内ヶ崎作三郎「近代人の信仰」(警醒社書店、大正二年)を参照。

(62) 例えば、内ヶ崎「祖国の政治家、学者、文士に対する要求」(前掲「近代人の信仰」)がそうである。

(63) 内ヶ崎「無意識の偉大」(前掲「近代人の信仰」、二四四頁)を参照。

(64) 内ヶ崎「霊的生命の反抗」(前掲「近代人の信仰」、一〇六頁)を参照。

(65) さらに、前掲「祖国の政治家、学者、文士に対する要求」においては、論壇における西洋追隨の立場を批判して以下のように述べている。「日本の青年評論家の努力は大に多とすべし、されども諸君が欧州の新文芸にのみかおれて、日本民族の現在と将来の發展とを觀察すること能はずとせば、諸君の折角の努力は空虚ならんのみ。諸君は欧米を望むと共に、滿韓清を眺めなければならぬ、諸君の周囲の国民の生活を研究せねばならぬ」(内ヶ崎「祖国の政治家、学者、文士に対する要求」(前掲「近代人の信仰」、三三三頁)を参照)。この文章から、内ヶ崎が西洋文明よりも自らの周囲であるアジア諸國の文明を見つめるべきであると主張していることがわかる。ここにも内ヶ崎の東洋重視の思想が現れているといえよう。

(66) 内ヶ崎「生の力」の本質」(前掲「近代人の信仰」、二〇五頁)を参照。

(67) 内ヶ崎「祖国の政治家、学者、文士に対する要求」(前掲「近代人の信仰」、三三五頁)を参照。

(68) 内ヶ崎「宗教生活の芸術的内容」(前掲「近代人の信仰」、四十二頁)

を参照。

(69) 内ヶ崎「靈的生命の反抗」(前掲「近代人の信仰」、八十八頁)を参照。

(70) 内ヶ崎「現代生活の權威」(前掲「近代人の信仰」、二一九頁)を参照。

(71) 内ヶ崎「祖国の政治家、学者、文士に対する要求」(前掲「近代人の信仰」、二四〇頁)を参照。

(72) 内ヶ崎「祖国の政治家、学者、文士に対する要求」(前掲「近代人の信仰」、二四六頁)を参照。

(73) しかしながら、内ヶ崎が一般的に言われていたような「軍国主義者」であったという判断を下すことはできない。彼は満州事変後も、議会政治を否定し独裁専制政治を行おうとする勢力に対し批判的で、独裁専制政治は「是れ全く憲政の破壊であると同時に、明治大帝勅語の一節に逆行するものにして、其の愚や笑ふべく、其の危険や図るべからざるものがあると謂はねばならぬ。」としている(内ヶ崎作三郎「議会政治か独裁政治か」へ「民政」昭和七年五月)を参照)。

【追記】 本稿の執筆にあたり、慶應義塾大学法学部玉井清教授に貴重な時間を割いて頂き懇到なる御指導を賜った。また筆者の仙台一高時代の恩師である国分芳雄先生、仙台市在住の内ヶ崎研究家でいらつしやる小野寺宏さんより貴重な御助言、御教示を頂いた。ここに記して感謝の意を表したい。

紛争をめぐる国際環境と法

——戦争違法化の一〇〇年の系譜——

村 田 祥 子

(赤木研究会三年)

序 説

- 一 第二次世界大戦以前の世界
 - (一) 外交手段としての戦争
 - (二) 無差別戦争観と勢力均衡論の崩壊
- 二 第二次世界大戦期の世界
 - (一) 無秩序の中の行動原則
 - (二) 植民地主義の遺産
 - (三) 国益と道義の相剋
- 三 第二次世界大戦以後の世界
 - (一) 国際人道法の発達
 - (二) 二つの軍事裁判
 - (三) 正戦論への回帰と違法化の前進
- 四 冷戦後の世界
 - (一) 冷戦終結と戦争違法化

- (一) 核をめぐる法体系
 - (二) 大國のディレンマ
- 結 語

序 説

一世紀という時は、しばしば大きな転換を含む一つの時代を形成する。今からおよそ一〇〇年前の世界を振り返ってみると、それはヨーロッパではバルカン進出をめぐる帝国主義国家間の複雑な同盟外交とその圧力に抵抗するナシヨナリズムとの摩擦が苛烈化し、第一次世界大戦への火種が確実なものとなっていた頃であり、アジアでは日清戦争終結後列強による中国分割が展開され始めた時期で